○議長（土屋清武君）　休憩前に引き続き会議を開きます。

（午前１０時４５分）

◇　渡　辺　文　彦　君

○議長（土屋清武君）　一般質問を続けます。

通告順位３番、渡辺文彦君。

（２番　渡辺文彦君　登壇）

○２番（渡辺文彦君）　通告に従いまして壇上より一般質問をいたしたいと思います。

この度の質問は、私は２点用意しました。１点目は、松崎版人口ビジョン・総合戦略の 28 年度における評価についてであります。この件に関しましては、先ほど行政報告があったわけですけれども、この件に関してちょっと自分なりの考えを述べてみたいと思っています。

地方創生法に基づき、松崎版の人口ビジョン及び総合戦略が策定されてきたわけですけれども、この取り組み自体がどういうものであるか、最近すごく疑問を抱くようになっております。

この戦略の中で、地方同士が競争することが求められているわけです。国の総人口が減少している中、地方に人を増やすことを求めている政策であります。

限られた人口のパイの中での奪い合いは、一方の成功は他方の敗者になることは当然考えられます。

今の国の政策は、一地方を存立させ、一地方を消滅させるという国策であるのが現状だとぼくは考えています。こういう政策は基本的にはおかしいと考えます。

つい先ごろ私は東京で財団法人日本自治創造学会主催の研修会に参加してまいりました。テーマは「人口減高齢化を乗り越える」でございます。そこで述べられていたのは、地方創生は国策の失敗を地方に押し付けるもので、地方はまじめに地方創生に取り組めば取り組むほど自治体の消滅は早まると語られていました。

いま、求められていることは人口減に対応した地域の実情に合わせた対策であるということでありました。

総合戦略を策定し１年が経過し、ＫＰＩ指標の単年度評価が求められているわけですが、この戦略そのものが持続可能な地域社会を担保しうるものになるのか、改めて考えてみたいと思います。

２点目は、美の漆喰文化を育むまちづくり事業についてであります。この事業は、総合戦略

の中でも扱われているものであります。地域が持続性を確保するためには、その地域独自の文化の継承、発展が求められていると考えます。

町は、なまこ壁の文化を地域資源としております。この資源の活用について以前、町はワークショップ等を通じていろいろな対策を検討してまいりました。そこから提言を受けているはずであります。その辺の提言をふまえ、今後この事業をどのような形で推進されていくのかをお伺いしたいと思います。

私の壇上からの一般質問はこれで終わります。

（町長　齋藤文彦君　登壇）

○町長（齋藤文彦君）　渡辺文彦議員の一般質問にお答えします。

１．松崎版、人口ビジョン総合戦略の 28 年度の評価について。①「人口ビジョン、総合戦略は KPI 指標を定め、年度ごと評価見直しをすることになっていることについて(1)人口ビジョン・総合戦略の業績評価は、いつ・だれが・どこで行ったか。(2)その会合における評価はいかなるものであったか。また、29 年度に対する方向性はどのように定めたのか。(3)評価のあり方は公表されることになっているがいつか」についてです。

平成 28 年３月に策定した「松崎町まち・ひと・しごと創生人口ビジョン・総合戦略」では、環境・文化の循環、ひと・経済の循環、子育て・教育の循環、健康長寿・安心社会の循環の４つの戦略のもと施策を進めていくとともに戦略の検証を行うこととしています。

総合戦略の検証にあたっては、町内の各種団体を網羅した全町的な委員会である「松崎町日本で最も美しい村推進委員会」を中心に、数値目標及び重要業績評価指標ＫＰＩの達成状況を検証することとしており、３月 28 日開催の委員会において、４つの戦略に基づき実施された事業の効果や今後の取り組みについて協議いたしました。

なお、総合戦略の実施状況につきましては、先ほどの行政報告の中で、ご報告させていただいたとおりであり、広報まつざき６月号においても、総合戦略の実施状況について掲載させていただいたところでございます。

総合戦略につきましては、今後も、常にＰＤＣＡを意識し、事務事業の内容、費用、効果等について評価・改善を行い推進してまいります。

２．「美の漆喰文化を育むまちづくり事業」について。①「当事業を進めるにあたり「松崎町なまこ壁の建造物の利用・活用を考えるワークショップが３回開かれている。そこで、利活用について何らかの提言があったと思うが、町はその提言を受けてどのような対応をするのか」についてです。

町では、昨年度、地方創生加速化交付金を活用し、「美の漆喰文化を育むまちづくり事業」として、松崎町の貴重な地域資源である、なまこ壁建造物の実態調査を実施するとともに、利活用について、町民の皆さまとともにワークショップを重ね、課題や利活用方法についてご意見・ご提案をいただきました。

参加者からは、なまこ壁保全区域の設定や、那賀川河口周辺の散策ルートの整備、中瀬邸、伊豆文邸、旧依田邸をモデルとした活用提案をいただきましたので、実現可能な事業について、対応を検討してまいりたいと思います。

以上でございます。

○２番（渡辺文彦君）　一問一答でお願いいたします。

○議長（土屋清武君）　許可します。

○２番（渡辺文彦君）　この度、ぼくは、その松崎版の人口ビジョン及び総合戦略に対するＫＰＩを中心に質問するつもりでいたわけでありますけれども、時間的な経過を考えて、成果を望むのは結構厳しいのかなと思っています。そんな中で、一応方針としては、毎年見直すということになっているものですから、その辺について若干の議論を踏まえながら、この政策がどのようなものであるか、壇上で発言したようなことをふまえながら確認したいと思います。

これにあたって、今回、私は、町が挙げている４つの施策に対しての細かいＫＰＩの数字に対して具体的に触れていく予定はございません。ただ、あくまでも、この総合戦略のあり方そのものについてもう一度見直したいと考えます。

それで伺うわけですけれども、総合戦略は、先ほど、ぼくは言いましたけれども、国策に基づいた地方版の総合戦略で、国が求めている人口に合わせるように地方の人口を設定することが求められた政策であります。ということは、それに合わせて、その松崎の総合戦略が策定されているわけですね。松崎の人口も将来的には 6400 人位を目途になんとかとどめたいということになっているわけですけれども、その根拠はどこにあるのか、正直言って疑問に感じます。

そこで、お伺いしたいと思います。町長は、もうこれで２期８年目が終わるわけですけれども、町長就任当時 8100 人位の人口があったと思います。現在、去年ついに 7000 人を割って、6921 人ですか、約 1200 人位減少しております。１年間で平均 150 名位の町からの減少がおきているわけですね。この問題をどのように基本的にお考えになるのか、その辺をちょっとお伺いしたいと思います。

○町長（齋藤文彦君）　非常に難しい問題で、第５次総合計画をスタートする時に、最終目標として 7000 人を堅持するということできたわけですけれども、２分の１のところで 7000 人を割

ってしまって非常に、何といいますか、残念だったなと思うわけでございます。

ただ、これは松崎町だけが人口減少しているわけじゃなくて、日本全国が人口減少しているわけだから、非常に難しいところがあるわけですけれども、松崎町もだいたい、こんなことを言うとあれですけれども、140～150 人の方が亡くなって、だいたい 30 人位の方が生まれるということで、だいたい 100 人以上は自然で減っていくわけで、これを、人口を増やすということはなかなか難しいわけですけれども、私は、人口減少で一番大変なのは、やっぱり生産労働者、生産する労働者がだんだん少なくなって、税金を納める人が少ないということで、私は、全町まるごとふる里自然体験学校、体験を通して対価を得ると、教師は町民であるということで、労働人口を少しでも 65 歳以上の方が税金を納められるような形でやってきたわけですけれども、人口が減少しているということは、それなりの成果が上がらなかったと思うわけですけれども、松崎町としては、松崎町なりにそれなりに一生懸命やってきているなと、やっているなと思っているところでございます。

○２番（渡辺文彦君）　町長がおっしゃるように、松崎町はおそらく一生懸命やってきたんだと思います。でも、これは、先ほど、ぼくが壇上から言いましたけれど、やればやるほど町の、自治体の存在自体が危うくなる政策であるということは、多くの学者が思っております。私は、おそらく本当にそれが事実だと思います。

それを受け入れざるを得ないのかなと思うわけで、どんどん、どんどん減っていく人口の中で、どの辺を着地点として見いだして、ここに住んでいる町民の方々が満足できる町になるか、そこを目指すべきなんだけれど、その辺が非常に難しいですよね。はっきり言って。

その前に、もう一回確認したいんですけれども、このＫＰＩでの指標を、美しい村推進委員会で行われているわけですけれども、美しい村運営委員会というのがありますね。運営委員会と推進委員会、どのように違うのか、その辺をまず１点確認させてください。

○企画観光課長（高橋良延君）　ただいまの質問の「日本で最も美しい村推進委員会」という組織がございます。これは、総合戦略の策定にも携わった委員会でございまして、こちらは、町の委員の方々33 名で構成されている委員会でございます。産官学金労言と申しますけれども、それぞれの産業団体、第１次産業から第３次産業まで、あるいは学校関係ですね。金融関係等々を含めまして、この 33 名でなる委員会におきまして、この総合戦略の検証もここで行うという形でございます。

なお、先ほど言いました運営委員会ですか、というのは、部会のことではないかなと思うんですけれど、委員会の中に総合戦略部会と景観部会ということで２つの部会を設けておりまし

て、それぞれその部会ごとでの審議、協議も行われているという形でございます。

○２番（渡辺文彦君）　わかりました。推進委員会は33名おられるわけですね。３月にその検討委員会が行われたわけですけれども、そこで何名の方が出席されて、どのような意見が出たのか、ちょっと参考のためにお伺いしたいんですけれども、よろしくお願いします。

○企画観光課長（高橋良延君）　出席者につきましては、25名の参加でございます。それで、その中でどんな意見が出たかといういま意見がありましたけれども、２つほど申し上げます。

１つは、まず、総合戦略の中に海を活用する、いわゆる水産ですね。水産関係者からあったんですけれども、海を活用する計画が出ていないのではないかというような意見がまず１点ございました。

やはり海洋スポーツとか、そういったスポーツツーリズムでは海の活用ということで謳ってあるわけですけれども、いわゆる生業、産業としてのこの海の活用、そういったものがこの総合戦略にちょっと欠けているんじゃないかなということがまず１点ほどございます。

それと、もう１点は、観光の関係では、インバウンドの関係の意見がありました。インバウンドの対策あるいは受入対応について不十分じゃないかというようなことも１点出たわけでございます。

なお、このインバウンドの受入あるいは対策については、平成29年度予算で皆様方にご審議いただきましたけれども、観光施設にＱＲコードといって、あのスマホとかをかざすと多言語でそちらの案内ができるというような、この多言語翻訳システムを29年度で観光施設あるいは案内看板等にそれを導入するということで、現在進めているということでございます。特にこの２点で、意見が出されたところでございます。

○２番（渡辺文彦君）　ぼくもその辺の意見をもっと細かく聞きたいところもあるんですけれども、とりあえず、この２点に関しての意見は大変重要な意見かと僕も思います。この辺は十分考慮した中で、また、この戦略を見つめ直す必要はあるとは思います。

また元に戻るわけですけれども、話が元に戻るわけですけれども、要は、松崎からいまどんどん、どんどん、人口は自然減もあるわけですけれども、社会減がおきているわけですね。というのは、基本的には、町に仕事がないということがいわれるわけです。東京に求める仕事を。ところが、東京は人がいっぱいになったから、これじゃ困るから、地方へまた連れ戻せということです。連れ戻すんだけれども、出て行った人は仕事がないから出て行ったわけです。都会にいる人間が仕事のない地方に来るかということです。問題は。これが可能な政策なのか、これが非常に疑問なんですね。

いま、南伊豆町は、今年社会増が若干あったわけですけれども、松崎はありません。だから、社会増、今回の人口ビジョンに関しては、田舎から減ってくるんだから、都会から呼び戻して地方の人口を増やせという政策であるわけですけれども、要は、受入皿が地方には整備されていないわけですよね。そういう現状の中で、この政策を打って、どれだけの効果があるのか、非常に疑問があるわけです。そういう疑問の中で直近の一番の課題として感じることは、町民の方々といろいろお話をしていると、「だんだん町がさびしくなってくる、何とかなんないのかね」という言い方をするわけです。

その中で、商売をやっている方も結構厳しいことをお話しされます。それで、町が今後どんどん、どんどん人口が減って、仮に 3000、4000 人になった時に、その方たちの生活が今以上にアップするという政策が可能なのかどうか、これが非常にわからない。この辺に対して、課長、誰でもいいです。こんな意見があるというのがあったら、提案して僕に教えてください。

○総務課長（高木和彦君）　渡辺議員は研修でいろいろなことを聞いてきたということでしたけれども、やはりいろいろな学者さんの考えは学者によって考え方も違うと思います。

一番思ったのは、この政策というのは、国の中で一番重要なのは、地方に仕事を作るというようなことが一番の核だと思います。そのため、私どもは、この戦略のものを内部でいろいろ考えて、例えば桜葉振興ですとか、子どもを育てるうえでの政策ですとか、そういうことを検討しているわけで、単に、国の、いろいろな考え方はあると思いますけれども、町に仕事を作って、活性化をしてくださいというのが国の考え方ではないかなと感じています。

○２番（渡辺文彦君）　いま、総務課長が言ったことは、総論としては正しいです。おそらく。おそらく総論はそういうことだと思います。

それでは、もう一回確認します。去年子どもらの発表会の中でもって、町に仕事がないと、ぼくは議会で、この場で発言したわけですけれども、子どもらが仕事がないと言っているんじゃないですかということを言ったわけですけれども、じゃあ、仕事は作ればいいんだという考え方じゃないかとは思うわけですけれども、地方に仕事を作るということで考えた時に、いま、社会のシステムとして、資本主義経済では経営者が一部いて、ほとんどが労働者になるわけですね。

ところが、地方では、みんな経営者を求めている政策なんですよ。基本的には。地方で仮に事業を興して、１人２人の雇用者が生まれるかもしれないですけれども、基本的には国が求めている政策はいろんな補助金を付けますから、あなた方はみんな自営業者で、自分で独立した商売をしてくださいという政策ばかりじゃないですか。

それが、一つでも大きく当たって、50 人とか 100 人雇用できるような事業所が生まれれば、それにこしたことはないわけですけれども、その可能性は非常に小さいとぼくは考えています。

商工会なんかに話を聞いても、松崎で 1000 万円以上のお金を動かせる人間っているのかねという話です。

このあいだの地方加速化交付金ですか、固定資産税の免除の件で、町には 1000 万円以上の資本金の方は 40 名おられるとかという話があったわけですけれども、その方たちが、今後この減少していく地域社会で事業を興せるかということなんですね。そもそも事業そのものというのは集積のメリットというのが絶対必要なわけであって、人が減っていくところで事業を興すとすると、いま、それが可能なのはインターネット関係ですね。通信販売。あとは、情報関係、それ以外は基本的にはおそらく限られると思います。

その産業はあまり人を使わないから、地方の人口は増えていかないんですね。おそらく。減っていく以上には増えていかない。となると、どういう事業が町に求められているかということになりますね。その辺に対して、総務課長、もう一度、どんな仕事があるか。

○総務課長（高木和彦君）　必ずしも町内に商店をつくるとか、新しい事業をつくるとかだけではなくて、もう少し見方を変えると、私は健康福祉課長の時に、お話をちょっとさせてもらいましたけれども、例えば聖和保育園の預かり時間を長くする。今まで４時だったものを６時半までにするということで、お母さんですとか、お父さんの通勤の幅は広がる。そうすると、松崎町の中に勤めなくても、下田で仕事ができるということもあります。

また、縦貫道につきましてもいろいろ私どもは促進協議会とかに行って、早く造っていただくように鮎川の土地を提供したりということをしていますけれども、そこで、下田から縦貫道に乗って、例えば伊豆市ですとか、そういうところに働きに行くというのも、これはやっぱり経済の活性化に繋がると思います。

一つひとつどの政策が満点の政策とは言えないと思いますけれども、小さなことですとか、いろいろのこと、またつい桜葉のことなんかを言ってしまいますけれども、農業の関係で、例えば 1000 万円以上の所得を得ている方もいます。

また、かつては、桜葉をやっていくことで一つのシーズンで蔵が建ったなていう話もあります。

そういうもの一つひとつ大事に掘り下げて、全体で松崎町の産業の活性化が図られればいいんじゃないかなと思います。

○町長（齋藤文彦君）　渡辺君の話を聞いているといつも暗くなるわけ。毎年言っているけれど、

松崎町にはいろいろな花がいっぱい咲いていると思うわけですね。

そして、その花が終わったら実がなるわけですけれども、その実を役場の職員とか企業とかが一緒に食べ合って、これは来年もっとこうしたら大きな実がなって、うまい実がなるぞというような形を作っていかないと、私は人が集まってこないなと思っています。

今年の連休中も松崎はさびしい、さびしいといっているわけですけれども、私はそれなりに流行っている店をずっと回ったんですけれども、お客さんはいっぱい入っていました。

それで、この花畑と桜の季節は俺のところはいっぱいになるよと、昔は、なんといいますかね。寄らば大樹の陰じゃないけれど、商工会、観光協会が腕を組んで、それで情報共有しながら進んでいたわけですけれども、今は、ネットが発達して一人ひとり、一つの企業が都市国家みたいでやっているわけですけれども、がんばっているところはいっぱいあるわけですよ。だから、そういうことを見れば、こういうふうにやればやれるのかなというのが、それぞれわかると思いますよね。ぼくは。起業するんだったら。

だから、松崎町で農業をやろうとしたら、桜葉とか桑葉、それを中心にやっていけば、それなりの人口は増えるなと思いますよ。

私は、人口は減少、減少と言いますけれども、私も高校時代に外に出たわけですけれども、あの頃は、テレビから本当に甘い映像が流れてきて、家に帰ってくると、外灯が３つくらいの岩地で、本当に鈴虫が鳴いて、ホタルが飛ぶけれども、人口は誰もいないように、こんなところは若い人が住むところじゃないと思って、私は外に出たわけですけれども、外に出て、比較対照して、それで地元の元気でやっているところの映像がこっちになるもので、都会でやるよりもこっちでやった方がいいなと、私は帰ってきたわけですけれども、そういう人たちがたくさんいると思うので、あまり暗く考えないで、松崎町は素晴らしいところがいっぱいあるわけですから、そういうところをうまく町としてもやっているわけですから、そう簡単に人口は増えないと思いますけれども、そんなにめちゃくちゃ私は減らないなと思っていますよ。

○企画観光課長（高橋良延君）　観光の面で一つ申し上げます。平成 27 年度に伊豆半島に来た観光客の総数は 4400 万人でございます。その 4400 万人で松崎町はどのくらいの入込みだったかというのは、先ほどのＫＰＩにありましたように 31 万人ということでございます。伊豆半島に 4400 万人来ていても松崎町に 31 万人の方しか立ち寄っていただけないといえばそれまででございますけれども、この 4400 万人の流動人口をいかに松崎町に立ち寄ってもらって、町の賑わいを取り戻すかというようなことで、結果的にそこのところは観光的な戦略等の中で非常に重要じゃないかなと思っています。

なので、分母は 4400 万人が現に来ているという事実があるわけですので、そこで松崎町に誘導するような形で、結果的にそこで賑わいを取り戻し、ビジネスにも繋がっていければ、それはまた一つの大きな戦略ではないかなと考えているところでございます。

○町長（齋藤文彦君）　もう一つ言いますけれども、いろいろ国交省に道路なんかのお願いに行くわけですけれども、やっぱり地方創生の一丁目一番地はやっぱり道路だと思っています。

それで、今度圏央道ができて、東駿河湾環状道路ができたおかげで本当に北関東からの車がめちゃくちゃ多くなったような感じがしますし、私の友人でシーカヤックをやる群馬の人がものすごく近くなったようなことを言っていますので、やっぱり伊豆市とか伊豆の国市はすごく流動人口が増えているわけで、今度ぼくらのところも下船原ができて、船原バイパスができると本当に近くなって、それなりのお客さんを呼べると思います。

ただ、その人たちが定住するうんぬんは別ですけれども、いま、いろいろスポーツとかなんとかでいろいろ地域に住みたいとかなんとかという人がいますので、スタンドアップパドルとか、シーカヤックとか、自転車で若い人たちが住めるような環境をとっていけば、それなりに人口は増えていくのかなと思っているところでございます。

○２番（渡辺文彦君）　先ほど企画観光課長が観光面から人口増の一つのビジョンみたいなものが示されたわけですけれども、この松崎に入って来る交流人口の数というのは、東北大震災の時を除けば、その時は落ちたわけですけれども、ずっと傾向的には右肩下がりでずっときているわけですね。

それまでのあいだ、町は伊豆半島地域は何もしないで無策で指をくわえて見ていたのかと、そうではないはずなんです。基本的には何らかの政策を打ってきているわけです。それでも、どんどん、どんどん人口減というか、交流人口減をまねいているわけです。

西伊豆町と松崎町を比べた時に、西伊豆町は松崎町の倍くらいの交流人口があるとは思うんですけれども、そこで、西伊豆町の交流人口の数はどこでカウントされているかというと、あの堂ヶ島とほかの宿泊大型施設ですね。そこに泊まっているお客さんでカウントされているんですよ。おそらく。

ところが、松崎の場合は、三聖苑だとか、中瀬邸だとか、長八だとか、そういうところでカウントされてくるわけですね。民宿のお客の方も当然それなりに入ってくるわけですけれども、宿泊数そのものはおそらく絶対量としてはキャパシティは減っています。いま、町内。にもかかわらず。それと同時に観光施設の来場者数というのも減っているわけですね。現状は。

だから、そのためにずっとなんとかしなきゃ、なんとかしなきゃということで対策を打って

きたはずなんですよ。おそらく今までもずっと。

　でも、結果が出ていない。ここで総合戦略を打って、それじゃあ、本当に好転するのか、その根拠がわからない。ぼくには。

　いろいろな政策をやらないよりはやった方がいいのかもしれないけれども、やったからといって、増えてくるという要素はあり得ないとぼくは考えます。

　道路がよくなれば、人は確かに入って来るんだけれども、おそらく。でも、松崎は道路がよくなればよくなるほど留まる施設がないために通過地点になるとぼくは考えています。

　だから、いまやるべきことは、町が通過点にならない政策であるはずなんだけど、それが功を奏していない。その辺がちょっと欠けているのかなと、そういう意味で、先ほどあったインバウンドとか、海の活用とかということはもっと主体的に取り組まなきゃならない新しい考え方かなとは思います。

　だから、今までも松崎の地域資源として挙げている棚田、なまこ壁、桜葉をずっとこれから整備していってもおそらく結構厳しいのかなと、人口減は避けられないんじゃないかなとぼくは考えます。

　そんな中で、もう一度、またさっきの話に戻るんですけれども、いま、7000 人の人口の方が今の生活に対して何らかの不安、将来に対しての不安を抱えているんだけれども、3000 人とか 4000 人の規模になった時に、その方たちの生活の安定とか、将来に対する展望は何によって担保されると考えますか。

○町長（齋藤文彦君）　そういうふうにならないように、いま一生懸命やっているわけで、もし渡辺君が町長だったら、こうすればそうならないよという提言をしてくれますか。

○２番（渡辺文彦君）　結局、町長の反問権でしょうけれども、正直言って、ぼくはまだそこのビジョンには到達はできていません。申し訳ないですけれども、そういう文句は言っていますけれども、政策、そこの具体的な面では、具体的にはありません。

　ただ、ぼくがいま言えることは、今までぼくがここの議会のこの場において述べてきたように、いま与えられた課題に対して、まじめに取り組んで、少しでも成果を出すことだけしかないと思っています。

　このあと、漆喰文化の件に関してちょっとお話はするんですけれども、そういう文化とかを本当にいかしきれていないから、これを、いま、本当にいかすべき、対策を打つべきではないかというのが、ぼくの基本的な考え方であります。回答になっているかどうかはわからないんですけれども・・。

ＫＰＩの中で、その対策の中で一つだけついでですから、述べてみたいと思うんですけれども、このあいだ、東京に行った講習会の中で、講師の方が、こんなことを言っておられました。いま、東京都の大学に進学している子どもの数は、地方から来る人間は２割５分しかない。ほとんどが東京圏の中にいる人間が東京の大学に進んでいる。そこで、その多くの都会の出身者が大学に行って、その方たちが官僚になって地方のことを考えるんだから、おそらく地方は報われないよねという言い方をしていました。これは、余談として、その時に、こんな発言があったんですね。いま、地方から東京に進学されると大変なお金がかかります。

いま、ヨーロッパは大学の授業料は無料なんです。ほとんど無料なんですね。だから、地方の学生はヨーロッパに留学すればいいというんですよ。即、もう東京の大学に行かないで、地方の大学からヨーロッパに行けばいい。生活費は東京でかかる生活費と変わらない。授業料はただなんだから、ヨーロッパに行った方が安くあがる。この考え方は非常にぼくは面白いと思う。

松崎高校の活性化を考える時に、松崎がインターナショナルの子どもらを育てられたら、すごく日本中から注目を浴びますね。おそらく。そのためには、幼児教育から徹底した英会話の、英語のスキルなり、会話力なり、知識が求められるわけですけれども、その辺に対しては、町は投資してもいいのかなとぼくは考えます。それがあって、町が、仮に、松高から１人ケンブリッジ大学に進学する人間がいたら、これはすごいですね。おそらく。おそらく日本中で話題になると思います。これは。

それは、松崎ではこういうふうにやっているからできたんだと、それが、あとに続く人間が何人か出てきたら、きっと松崎高校がそれこそ世界に注目される高校になるかもしれない。これは夢ですけれどもね。ただ、そんなことも考えてもいいのかなと考えます。

時間もそろそろ限られてきましたので、この辺の話をやっていると、もう結局、町はやっているんだと、でも、まだこれからだよということで終わるかと思うわけですね。もっと具体的な面でもっと美の漆喰文化を育む事業について、ちょっと触れておきたいと思います。

この事業に関しては、地方加速化交付金ですか、それを使っていろいろ策定がされたわけですね。ぼくもここに３回のワークショップに参加しましたので、資料を持っているわけですけれども、そこでいろいろな提言がされておりました。

今回、またこのことを提案するにあたって、考えるにあたって、一応またこの施設、今回のワークショップで対象になっている伊豆文邸と中瀬邸と依田邸ですね。大沢の依田邸です。依田邸はちょっと行かなかったんですけれども、中瀬邸と伊豆文邸にちょっと顔を出して、どう

かなという印象で、どんなふうになっているかなということで見に行きました。

ワークショップの提言では、３月で終わっているんですけれども、今すぐできることということで提言がされていました。

いま、とりあえず、伊豆文邸、中瀬邸に関しては、とりあえず倉庫の中の片付けくらいはできるかなと、そんな話が出ていたんですね。その中で、その後どんなふうな形になっているのかなということで、見に行ったわけですけれども、第一印象、中瀬邸にしても伊豆文邸にしても整理がされていない。あまりにも手入れがされていない。

観光客がこの施設に来て、これはなんだろうというのが、おそらく印象だと思います。草ぼうぼう、庭も庭園といったら庭園なのか、庭というのか、わからないですけれども、整備されている雰囲気がさらさらない。そういうところにお客さんが来て、ここは松崎の地域資源なんですよといって、好感を得られるのかなというのが正直な感想でした。それは、ここにとどめておいて、とりあえず、一つひとつの、先ほど、藤井議員もおっしゃったように、今度もらう依田邸ですか、その辺も含めて、面的な整備はどうかなということをおっしゃっていたと思うんですけれども、前の総務課長がおられる時に、長八の周辺に人がとどまれるような施設をつくりたいということを全員協議会でおっしゃっていたと思います。

その時に、具体的にどんなふうだったのか、はっきりいま覚えていないんですけれども、その中で、仮に長八にとどまって、伊豆文邸に立ち寄って、それから町を散策してもらうコースを考えた時、入口が、まずお客さんが入ってみたいなという雰囲気になっていない。これだとどうかなと、そのいろんな施設の提案がされているんだけれども、これからまた考えていきますよということで、具体的に何も動いていない。となると、これがいつになったら、いろんな提言なりが生かされてくるのかなというのが正直な気持ちなんですね。

ぼくは、これもちょっとぼくの勝手な考え方なんですけれども、このあいだ、公営企業委員会の中で、温泉の利活用ということがテーマになっていたわけですけれども、町長は、長八 200 年祭の際に、長八の湯をつくりたかったということをおっしゃっていましたよね。それはできなかったということ言われたわけです。そんな中で、ぼくは、これは可能かどうかは別にして、あの伊豆文邸の蔵を風呂にできないかなと考えていたわけです。ずっと。あそこで風呂に入れば、ちょっとなんか面白いのかなと、全体のレイアウトはまた当然考えていかなくちゃいけないことなんでしょうけれども。あそこの利用を喫茶店にするとか、お土産物屋にするとかという提言がワークショップであったんですけれども、結局そこでやる人は、利益、事業として成り立たなければ、参加してこないですよね。おこらく。それを考えると、やっぱり町が有効的

な利用を考えるのがベターかなと考えます。

町長、どうですか、あそこに温泉をつくりませんか。

○町長（齋藤文彦君）　私は、はじめから長八200年祭の時にあそこへ長八の湯というをつくって、あそこは駐車場もありますし、美術館を観ながら、風呂に入って帰ると。また、松崎の人も作業が終わって、家に帰る時にちょっと風呂に入って帰るというのがいいなと思って提言したわけですけれども、なかなか内部でまとまらなかったんです。

そして、もう一つ、私が考えているのは、松崎新港があるわけですけれども、あそこに時々弁当を持っていくわけですけれども、最高なわけで、夕陽が沈む時に。あそこに本当に、犬吠岬にすごい足湯がありますけれども、それに負けない足湯になれると思っているので、そこに足湯をつくりたいなと。

もう一つは、これは私の考えで、すぐに実際はできないですけれど、もう一つは、観光協会の前に丸高の駐車場がありますけれども、あの川沿いに駿河屋さんを見渡す、あそこに足湯をつくって、向こうを見られるような形になれば、本当にいいのかなと思っているわけですけれども、なかなか実現に至らないわけですけれども、それをぜひ近々本当にやってみたいなと思っているところでございます。

○企画観光課長（高橋良延君）　松崎町の総合計画がございますけれども、総合計画におきましては、観光施設整備の中で伊豆の長八美術館のところでございますけれども、地場産品の直売施設の検討ですとか、いわゆる入浴施設ですね。いま、渡辺議員がおっしゃったように立ち寄り湯というようなことで、総合計画の中では謳ってあるわけでございます。

それは、やはり松崎町の長八美術館のところに、いま言ったように、お客さんが何しろあそこに止まってみたいというような誘導を仕掛けなければ、当然街中に人は流れてこないということも考えられますので、そういった計画は上がってきたのであろうと考えております。なので、今後、その長八美術館の周辺整備の計画のところでは、具体的に検討されていくということでございます。

○２番（渡辺文彦君）　今の町長の答弁でちょっと気になることがあるんですね。このあいだも公営企業委員会の中で同じことを町長はおっしゃっていたわけですけれども、ぼくはやりたかったけれど、できなかったという発言がされていたわけです。

でも、町長はトップなんです。ぼくはこうやるから、みんなこういうふうに計画を作ってくれというのが町長の立場なんじゃないかなとぼくは思うわけです。

その辺でちょっとリーダーシップが弱かったのかなとぼくは思うわけですけれども、まだ期

間はあるわけですから、なるたけ自分の意思を貫いて、それを予算化して、何とか人がとどまるような施設をお願いします。伊豆文邸に関してはこの辺にしておいて、あと、もう一つ、中瀬邸に関してちょっとだけ、これはまた参考程度に聞いていただければいいんですけれども、中瀬邸の施設としては大変立派なものなんですけれども、やっぱりインパクトがないですよね。よそのお客さんに見てもらって、これはすごいなというところまではいくかもしれないけれど、それ以上に入っていけないというか、その辺がちょっと弱いのかなと思ったわけです。

そんな中で、いま、岩科小学校の方で機織りをやっている方々がおられます。あの方たちが以前、昔そこで、中瀬邸で機織りをやったということもあるらしいんですけれども、今はあそこを使わないで、また岩科にいっているわけですけれども、それを再度もう一回復活したらどうかなとぼくは思っています。あそこで、あの銀座通りの方が戸閉になっているんですね。いま。あそこを開放して、いま、図面上ではアトリエとなっているんですね。あそこのところは。その隣が映画のロケ地になった展示か何かがされています。

そのアトリエ部分にあれをもってきて、外から見て、これは何をやっているかなとお客さんに訴える場をやっぱりつくった方がいいと思います。あの空間がもったいない。あの通りが全部閉まっていて、全部じゃないけど、かなり閉まっていて、なおかつこの町の施設もそこで戸閉めされているわけですね。これはやっぱりちょっと考えた方がいいのかなと思います。

利用の形態はまた皆さんで考えていただければいいんですけれども、ぼくは、せっかくだからあそこで機織りでもやって、体験できるような場でもつくってもらったらいいのかなと考えるわけです。その辺に対して、企画観光課長いかがですか。

○企画観光課長（高橋良延君）　中瀬邸のアトリエの利用ということでありました。確か、私の記憶では、以前、アトリエのところで機織りはやっていた記憶があります。それが、その方々の事情か何かわかりませんけれども、岩科の方に移っていったというような形かなと思うので、以前はやっぱり中瀬邸のあの利用という形でやっていた事実はあるものですから、そこは、なんで向こうにいったかという事情等は聞かなければわかりませんけれども、機織りについては、あそこでやっていた事実があるものですから、できる可能性としては、十分あるかなと思います。

○２番（渡辺文彦君）　中瀬邸にしても、伊豆文邸にしても、やっぱりもう少し旅行に来られた方が、そこに何か立ち寄ってもらって、あわよくば若干でもお金を落としていただけるような施設をやっぱり作っていくというのが基本なのかなと思います。

余談ですけれども、地方創生を初めてやった方は、二宮尊徳なんだそうですね。あの方は、

どういう政策を打ったかというと、基本的には、地域の金、地域から金を出さない、地域に金を引き込むという政策だったらしいです。それが、地方創生の原点だったと。おそらく今の地方創生の考え方もそこにあるんだろうということをおっしゃっていました。

だから、町もせっかくきていただいたお客さんに少しでもお金を落としていただいて、その金が外に出ていかないような経済循環をやっぱり考える必要があるのかなと思います。

最後に、ちょっとだけ、時間がありますから、大沢の依田邸についてなんですけれども、これは先ほどから藤井議員も聞いているんですけれども、道の駅パーク構想の中で、これから進めていくんだということになっているわけですけれども、やっぱり藤井議員がおっしゃったように、とりあえず、ＮＰＯに委託することは、町にとって損ではないというふうに町長はおっしゃっているわけですけれども、それは、ぼくは、町民には理解してもらえないと思います。そういう考え方は。

やっぱり何らかの形で費用対効果を出さなければ無理だと思います。ただ、あそこは重要だから、計画ができるまであそこに委託するんだという、その考え方は、おそらく町民には理解していただけないと思います。

そもそもあそこを購入する時点で、計画をもって買うべきだったはずなのに、それが後手を踏んでいるわけですね。順序が逆になっているわけです。これは、やっぱり基本的には間違っていると思います。

だから、それを考えると、やっぱりいま伊豆学に利用していただくことは、今の段階では仕方がないにしても、伊豆学と町との関係は、もう少し町民にわかる形で契約を結ばれた方が、ぼくはいいのかなと思います。その辺に対して、町長、どうですか。

○議長（土屋清武君）　ちょっと時間が。

○２番（渡辺文彦君）　とりあえず、５分延長をお願いします。

○議長（土屋清武君）　５分延長を許可します。

○企画観光課長（高橋良延君）　伊豆学との関係という形でありますけれども、当初、当然所有権移転後、町の所有ということになりましたけれども、今現在、道の駅パーク構想をこの１年かけて行うという形で進んでいますので、そこはやはり基本計画が定まるまでは、連携して管理にあたるということは、先ほど申し上げたとおりでございますので、それについて町民に見える形でということで、こういうことになりましたというお知らせはしていないですけれども、やはりまだ建物の活用が決まっていない段階で、やはりあそこを有効活用していこうという中で、伊豆学と覚書を結んで、いま、連携しているところでございます。

○町長（齋藤文彦君）　私も、伊豆学の橋本さんとか、松崎の渡辺さんたちと話をしているわけですけれども、本当に松崎のことを思って一生懸命やってくれて、町の人が反感を持つようなことはないと思うわけで、それで、本当にいろいろ新聞とか雑誌とかに依田邸のことが出るわけですけれども、これは本当に一生懸命やってくれているから、やっぱり記者なんかも書かざるを得ない。一生懸命やっていて素晴らしいところだということで、書かざるを得ないところがあると思うわけですけれども、本当に１年間ちょっとかかると思うんですけれども、伊豆学の皆さんがあそこでやって、活躍してくれることは、本当に松崎のために、私は本当に役立っていいことだなと思っているところです。

○２番（渡辺文彦君）　とりあえず、ぼくも今の段階では、伊豆学の方が利用することに対しては否定はしません。大いにあの方たちが依田邸を活用していただいているということは、ぼくも理解しております。

ただ、やっぱり計画がないまま買ってしまっているということが一番の問題であって、この経過、町がどういう形で利用計画をしていくのか、それはやっぱり早急にまとめていただきたい。でないと、やっぱりこれを何年も何年も引き伸ばしなんてことは絶対に避けていただきたいと思います。

もう時間ですから、まとめたいと思いますけれども、基本的にぼくは、この総合戦略に対して、最初はこれを利用して町をうんと元気にしたいなと思っていたわけです。基本的に、ぼくは。だから、議員になって、これに対するいろんな発言をしたいと思って、この場に臨んできたわけです。でも、よくよく考えると、先ほど冒頭でもおっしゃったように、この戦略は基本的にはおかしいんだと、絶対に。

総人口が減っている中で、一地方が生き残るということは、ほかの地方から衰退するということですよね。おそらく。

実際に、ほかの研修会で鳥取の事例を聞いたんですけれども、隣町で政策の違いで人口の移動が起きたというんですよね。西伊豆町と松崎みたいなもんですよ。教育費をただにするからみたいな形で人口移動が起きている。それって本当に地方創生なんだろうかと正直疑問に思いますよね。そういう政策を我々はとり続けるのかと、これはやっぱり考えた方がいいと思います。

じゃあ、自分たちは、このまましなければ、どんどん、どんどん人口が減っていくわけだから、どこかで何らかの形で着地点を見出さなければいけないわけですよね。そのために、いまやらなきゃいけないことは何かということで、いろんな提言が、対策が講じられているわけで

すけれども、もっと的を絞って対応すべきだとぼくは考えます。

基本的には、その的がどこにあるかといったら、地域の仕事をどういう形で確保するかの１点に尽きると思います。これをやっていかないといくら子育て支援をしていても、そこで育っていく子どもらはやがて地方から出て、都会に行ってしまうわけです。地方のお金で育てて、都会に人を送りだしてしまうわけですね。

そういう政策はやっぱり基本的にはおかしいんじゃないかな。でも、いま、現状の問題として、最善の策なのかもしれないけれども、もっともっと次を見据えた対策を考えていく必要があるのかなというのが、ぼくの考え方です。そういう中で、美の漆喰文化を育む事業というのも、具体的な例として、どういう取り組みが必要なのか、考える方法として取り上げたわけであります。

今後、まだあと４年間総合戦略が残されて、期間が残されるわけですけれども、おそらくこのＫＰＩにも出しているような新規事業には、おそらくかなり遠い数字になるとぼくは考えます。

でも、その中でも若干でも兆しが見えるような方向ができればいいかなと思います。その辺で皆さんのご活躍を期待しております。

これにて、ぼくの一般質問を終わらせていただきます。

○議長（土屋清武君）　以上で渡辺文彦君の一般質問を終わります。

午後１時まで休憩いたします。

（午前１１時３８分）